

スモン調査研究協議会研究報告書

No.3

昭和 45 年度病原班研究報告

昭和 46 年 3 月

スモン調査研究協議会

目 次

序	1
SMONにおける Echo 21 型ウイルスの役割	新宮正久 3
SMON患者血清の Echo 21 型ウイルスに対する補体要求性中和抗体について	原 稔 ほか 11
スモン患者の Echo 21 型ウイルスに対する補体要求性中和抗体について	上田重晴 ほか 14
SMON患者血清のエンテロウイルス抗体保有状況の調査研究	多ヶ谷 勇 18
北海道における SMON の病原に関する研究	飯田広夫 ほか 25
SMON のウイルス学的研究	井上幸重 ほか 31
SMON 病原の電顕的観察	東 昇 43
〔付〕 SMON 病原のネガティブ染色の電子顕微鏡的研究	東 昇 45
BAT-6 細胞に関する追試実験成績	甲野礼作 ほか 49
スモン患者よりのウイルス分離の試み	奥野良臣 ほか 54
スモンのウイルス学的検討	永田育也 ほか 58
培養細胞による病原分離の試み	俵 寿太郎 ほか 73
スモン研究班報告	石田名香雄 ほか 81
SMON 患者の舌苔および糞便よりの Mycoplasma の検出	本間 遜 ほか 83
SMON 患者由来マイコプラズマによる患者血清反応	富山哲雄 93
スモン患者舌よりのマイコプラズマの分離	中村昌弘 98
SMON 患者材料よりのマイコプラズマ分離の試み	甲野礼作 ほか 103

BAT細胞におけるMycoplasmaの汚染	尾形 学ほか	107
岡山県井原市民病院入院SMON患者の細菌血清学的検査成績		
1. Salmonella infantisを分離した1死亡例を含む大便の細菌学的検査	中谷林太郎 ほか	117
岡山県SMON患者の細菌血清学的検査成績		
2. サルモネラ・赤痢菌に対する血清凝集素価	中谷林太郎 ほか	122
SMON患者における細菌血清学的検索	小沢 教 ほか	130
北大阪地区SMON患者の細菌血清学的検索	三輪谷俊夫	145
スモン患者の腸内細菌叢とキノホルム	中谷林太郎 ほか	153
SMON患者の緑尿および緑便に含まれる緑色物質の本態	田村 善蔵	159
SMON患者の緑色舌苔からのキノホルムの検出	田村 善蔵	162
生体組織よりキノホルム検出の試み 蛍光比色法その他一、二の方法	上田 喜一 ほか	164
キノホルムグルクロナイドの合成およびその性状	田村 善蔵	170
血清中の非抱合型キノホルムの定量	田村 善蔵	173
生体試料からの非抱合型キノホルムの微量分析	田村 善蔵	176
SMON患者の臓器および組織へのキノホルムの貯留について	田村 善蔵 ほか	179
SMON患者のイソケットピン酸負荷試験	田村 善蔵 ほか	181
マウスの抗ヒツジ赤血球抗体産生に及ぼすキノホルムの影響	松橋 直 ほか	184
キノホルムの毒性に関する研究	池田良雄 ほか	190
キノホルム経口投与による猿の両下肢マヒ	高橋理明 ほか	201
スモン患者の臓器、尿、尿および緑色舌苔中の重金属測定	池田良雄 ほか	207
会議開催状況及び会員名簿		215

序

昭和45年11月スモン調査研究協議会研究報告書第1集を発刊してから約半々年、臨床、病原、病理の各班の研究報告書を相次いで刊行するに至つたことは、会の世話役として大変喜ばしいことである。

さて昭和45年度は「スモンの病因と治療に関する特別研究」に対し、厚生科学特別研究費5,000万円が認められ、引続きその研究が調査研究協議会に委託された。

調査研究協議会の研究方針は、原因不明疾患の研究の常道によつてmulti-disciplinaryの原則に従い、可能な限り、また考え得る限り各方面から、それぞれの専門家の手によつて、アプローチを試みたわけである。

従つて研究班員の数も、昭和44年度の方に対し、23名が新たに追加され、総計64名となつた。

これら研究班員各位の問題解決に対する熱意と努力の結果として、スモンの病因究明に対する多くの有力な手掛りが、昭和45年度の研究から生れてきた。この網にかかつた最も大きな魚はキノホルムであるといえよう。とくに、調査研究協議会の研究成果に基いて、昭和45年9月8日キノホルム発売中止の処置が、政府によつて行われてからスモン患者の発生が激減をみたことは特筆しなくてはならない。

もとより現時点においてはキノホルムを原因と断定するのは時期尚早ではあるが、スモン発症に対する影響はもはや何人も否定できないと思われる。しかしなおウイルス、マイコプラズマ、腸内細菌などの微生物因子や農薬の影響などにも考慮を払いつつ研究を推進しなくてはならない。

病因研究の華々しさに対比して、治療研究の成果が少ないのは遺憾であるが、事の性質上止むを得ない面がある。しかし、少しずつではあるが、地道な努力が治療やレハビリテーションの改善に払われ、成果が現われつつある。

ことに昭和44年9月2日スモン調査研究協議会発足以来、昭和45年度までの臨床、病原、病理研究成果のあゆみを今回の第2、3、4集にまとめ世に送る次第である。

昭和46年3月

スモン調査研究協議会

会長 甲 野 礼 作